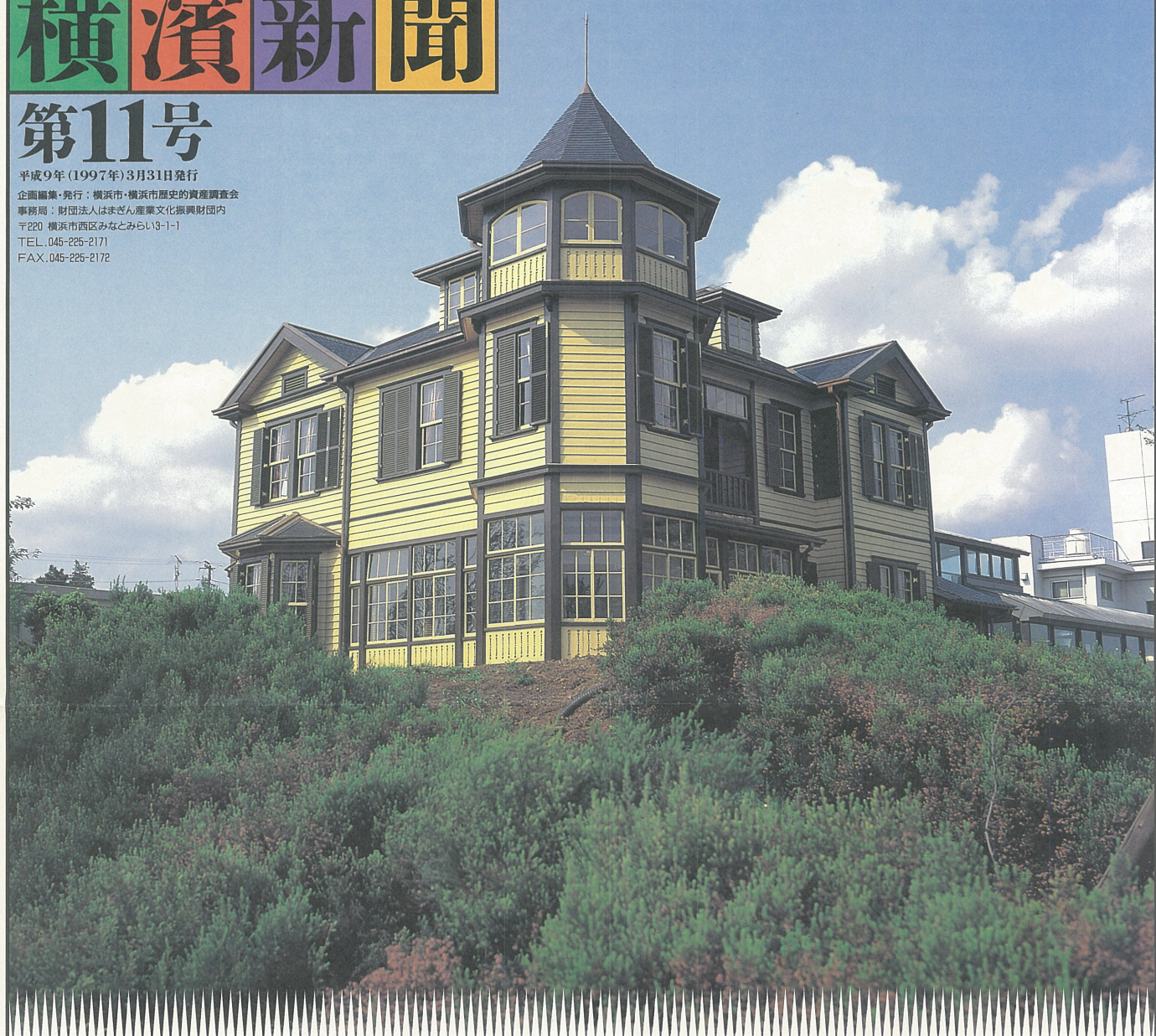


歴史を生かしたまちづくり

横濱新聞

第11号

平成9年(1997年)3月31日発行
 企画編集・発行：横浜市・横浜市の歴史資産調査会
 事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内
 〒220 横浜西区みなとみらい3-1-1
 TEL.045-225-2171
 FAX.045-225-2172



外交官の家 重文 旧内田家住宅の移築復原再生に当って想うこと

写真撮影：米山淳一
 神戸芸術工科大学 名誉教授・横浜市の歴史資産調査会 顧問兼調査委員 坂本勝比古

フランスの言葉に“コンセルヴァ・セ・クレエ”という表現がある。日本語に直訳すると“保存することは創造すること”の意味である。

この度の“外交官の家”の移築、復原再生の事業は、まさにこの言葉にふさわしい出来事であった。曾て東京渋谷の南平台にあったこの明治の西洋館は、他の多くの館がそうであったように、普通ならとっくの昔に取り壊されていたことであろう。

しかし、この西洋館の場合はそのようなことにはならなかった。この住宅に寄せる所有者であった宮入久さんの深い愛情とその気持ちを支えた周囲の多くの人々の懸命な努力があって、この西洋館は再び不死鳥のように甦ったのである。

今この建物のとんがり帽子のような尖塔のある西洋館のたたずまいは、我々をして遠い明治の頃の洋風文化礼讃の時代を思い起こさせるものがある。

人間でもそうであるが、私は建物にも人間と同じように数奇な運命を辿る人生というか、建物の生き様があるように思えてならない。特に住宅の場合はその感がひとしおである。住宅はその名の通り人間が生活し住まう容器であり、両親や祖父母や先祖が代々住み続け、その家庭の生活が染み着いた親しみと懐かしさがこもった存在である。

したがって、住宅は仮の宿とか仇おろそかに建てるものでは決してないと思う。ましてや地震で壊れて人命を損なうようなことは決してあってはならないのである。

この西洋館もあの関東大震災や東京空襲の惨禍を力強く生き抜いてきた歴史をもっている。それはこの西洋館がしっかりとした構造をもち、幸運にも恵まれたからともいえよう。

この西洋館は、その名のように明治、大正、昭和にわたって活躍した日本の外交官の住まいであった。そこには長い外国での生活に



玄関ホール



玄関内側扉



食堂

培かれた洋風の生活があった。ベランダやペンキ塗りの下見板、上げ下げ窓、よろい戸、玄関ポーチ、応接間や食堂の家具などはその特徴であるが、その特徴は、そのままこの横浜山手の曾ての外国人住宅に多く見られる姿であった。

したがって、この西洋館がこの地に移築されても周囲の環境と比較して全く異和感がなく、むしろその景観を引き立たせることに役立っているともいえよう。

このことは先に述べたフランスの格言“保存することは創造すること”という言葉の意味

をまさに象徴しているともいえるのである。

この度、この“外交官の家”が無事に移築再建され、国の重要文化財に指定されて保存活用されるに至ったことは、大変喜ばしいことであり、このために努力を払われた宮入さん始め、多くの関係者のご尽力に深く敬意を表すると共に、新しい生命を得たこの館がこれからも未永く市民の憩いの場として、文化遺産として生き続けていくことを希って止まない次第である。

※平成9年3月21日、文化財保護審議会において答申され、官報告示は5月中旬予定。

言葉に尽くせぬ 想い

夢を叶えた偶然の出会い 宮入久子

こうして実際に復原した姿をこの目で夢のように、言葉では言い尽くせない想いで胸がいっぱいです。この家は私にとって、自分の体の一部と言っていらい愛している家なのです。それがこのように素晴らしい場所に移築されて、本当に幸運な家だと思います。



内田定雄

あの時、今から11年前の暮れの日、陣内先生にほんの2、3分の差でお会いできなかったら、今日はなかったと思います。当時手入れも行き届かず、お見せするのが恥ずかしいという私に、私たちはそういうところは見ないんですよといってくださいました先生の優しさが思い出されます。その時に先生が書かれた本は、今でも私の宝物です。

この家も火事があったり、焼夷弾が飛んできたりと何度か危険な目に遭ってきました。そのたびに多くの方のお力添えで難を切り抜けて参りました。今回も陣内先生、藤森先生はじめこの家の完成のために努力してくださった皆様へ感謝の気持ちでいっぱい입니다。



妻 内田陽子

ミッションアーキテクト J.McD.ガーディナー

ガーディナー (James McDonald Gardiner 1857.5.22~1925.11.25) はセントルイス出身のスコットランド系アメリカ人である。1875年にハーバード大学に入学するが2年で中退、NYやその周辺で働いていた。80年、米国聖公会伝道局から東京築地の立教学校教師に指名され、その年の10月14日、Tokio丸で横浜港についた。コンドル来日の3年後である。築地に赴任し、まず施設の不備に驚き、専門教育を受けてはいないが、元来建築に興味のあった彼は、独学で施設の改善と新築計画に取り組み、82年に自邸を兼ねた立教女学校校舎、84年に立教学校校舎を完成させた。以後、立教の校長として、そして、ミッションアーキテクトとして活躍した。89年に完成した

聖三一大聖堂、神学校、付属図書館等は洋館の多い築地でもひととき目立つ本格的ヴィクトリアン建築であった。94年にはハーバード大学の学部学位を取得し立教大教授となるが、次第に建築活動が多くなって1903年頃には設計事務所を開設して建築に専心した。聖公会以外の建物も数多く手がけたが、その多くは関東大震災で消滅した。コンドルのようにメジャーな存在ではなかったが、現存が確認されている作品9棟のうち7棟が国や県・市の文化財に指定または登録され保存されている。内田邸もその一つである。未指定の2棟も現役の大使館として大切に維持されている。

晩年まで日本で建築活動を続けたが、1925年聖路加病院で死去した。娘に「ハスノハナ」と名付けるほどの親日家であった彼の遺骨は、妻、娘、孫らの遺骨とともに彼自身の設計による日光真光教会に埋葬されている。 松波秀子



ガーディナーとその家族 (左からアーテスティン、ガーディナー、ハスノハナ、妻フロレンス、リリアン)

よみがえった内田定雄邸の 家具 小泉和子

このたびおこなわれた旧内田定雄邸の修復では家具も復元され、明治時代の外交官の邸宅が家具・室内そろった形で公開されることになった。

解体時、内田邸に残っていた当初の家具は3種類、個数で言うと20個ほどであった。この残っていた家具と昔の写真を参考にして復元したのであるが、どうもこの家の家具には2種類あったようだ。

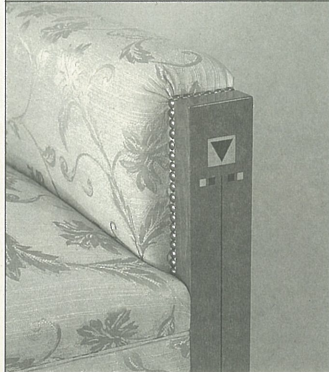
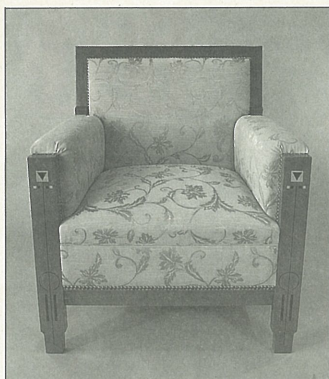
一種はガーディナー自身が設計したと考えられるもので、食堂のサイドボードとか配膳棚、大客間の椅子などがそうである。これらはアール・ヌーヴォーということになるが、フランス風の曲線的で優美なものではなく、直線的、構成的で堅実なスタイルは、むしろアール・ヌーヴォーの元祖のアーツ&クラフト運動に近い。にもかかわらずサイドボードの細部にアール・ヌーヴォー特有の曲線構成の花のレリーフをつけたりしてあるところなど、自由というか、なんとなく素人っぽい。これはガーディナーが家具の専門家でなかったことによるのであろうが、だがそれにしては堂々として、さすが家具とともに生きて来た西洋人の仕事である。

もう一種はごく一般的な様式家具である。食卓、食堂椅子、カウチ、小客間の応接セットなどがそうである。ここまでガーディナーの手が及ばな



食堂サイドボード

ったのかもしれないが、やはり重文に指定されている北九州アール・ヌーヴォー建築、松本健次郎邸の家具も、アール・ヌーヴォーは一部で、ほかは様式家具である。様式家具の方がいかにも西洋風なので好まれたのかも知れない。その意味ではこの内田邸は当時の上流階級の典型的なインテリアだといえる。



大客間ソファ

移築復原工事を振り返って

平成6年5月より始まった旧内田邸の移築復原工事も3年にわたる期間をもって、平成9年3月に無事完了した。開始当初より、この事業は、歴史的に評価の高いこの建物の価値を移築のなかでどうやって維持し、また建築物としていかに新たな生を与えるかが、終始最大のテーマであった。そういった背景から、解体工事前から綿密な調査を行い、建物の履歴や明治の創建の姿を解明した。続



建築工事中の内田邸 (明治43年5月22日)

く組立工事では、できる限り創建からの部材を再使用し、そして明治の失われつつある技術を再生しようとした。この建物の構成材は床や建具はもちろん、見えない壁中の柱や梁に至るまでほとんど真正正銘、明治時代からの部材を再使用している。また、漆喰壁、天井や屋根、建具金物、タイルや照明にいたるまで創建の頃の品や工法をできる限り忠実に再現した。外からはわからない部分にいたるまでの気配りは、数十年後に再び行われる修復工事へ託された、いわばタイムカプセルともいえる。重要文化財となるこの建物の最初の修復工事として、後世に恥ずかしくない工事を行うことこそが、今回の移築事業の最大の責務といえる。 木下純

木造洋館としては 初めての重要文化財

外交官の家が今年3月に開催された文化財保護審議会の答申を受け、重要文化財に指定される。市内の木造洋館としては初めての指定。最近では平成元年に横浜市開港記念会館が指定されて以来8年ぶり、14件目の重文指定となる。指定理由として、アメリカ・ヴィクトリアン様式の洋館で改造がほとんどなく、アーツ・アンド・クラフツの影響が見られる内装仕上げがほぼ全て残り、ガーディナーの代表的住宅作品として貴重であることが評価された。

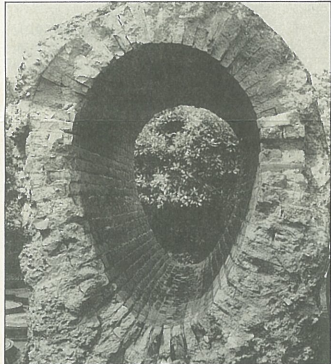
捨てられなくて良かったね 戦前の山葉オルガン

それは、昨年7月のことだった。「ブラフ18番館で都市デザイン室を紹介してもらったんですが…、古いオルガンをそちらでもらっていただけないでしょうか…。もし、無理なら粗大ゴミに出そうと思ってるんですけど…。」受話器の向こうのご婦人は、叔母から譲り受けたものを大切に保管していたことを話してくれた。早速お宅へ伺い、ヤマハの本社にも問い合わせ、このオルガンの寄贈を受けることになった。このオルガンは「山葉8号」というもので、製造番号から昭和13年頃製造されたものと考えられる。押せば複数の音が一度に鳴るストップボタンなど興味深いところがたくさんあり、見る人の目を楽しませてくれる。ちなみに当時の定価は180円。



土の中で110年！ 掘り出された明治時代の大下水

昨年、横浜税関前に続き、県庁前の地中からも明治時代のレンガ製大下水が発見された。この大下水は、関内外国人居留地で流行したコレラの予防策などのために施工された下水道約4kmの一部で、わが国最初の近代下水道管である。100年以上も経っているが、卵形に積まれたレンガはほとんど傷みがなく、当時のレンガ積の技術の素晴らしさを物語っている。現在、中部下水処理場の屋外展示場に保管されている。



港の発展を支えた土木遺構や郊外の古民家など8件認定 認定歴史的建造物は合計32件に

横浜市は、「歴史を生かしたまちづくり要綱」に基づく認定歴史的建造物として、新たに港一号橋梁、新川家住宅主屋など8件を認定した。今回は、歴史と港を感じながら散歩できるプロムナード「汽車道」(桜木町から赤れんが倉庫へのルート)として整備される土木遺構と、農家のたすまいを伝える郊外の古民家などの計8件。これにより認定歴史的建造物は合計32件となった。

●港一号橋梁

新港埠頭の海陸連絡設備である臨港鉄道の一環として敷設された橋梁。それまでのイギリス系トラス橋にかわる、代表的なアメリカ系トラス橋である。

●港二号橋梁

新港埠頭の海陸連絡設備である臨港鉄道の一環として敷設された橋梁。「港一号橋梁」と全く同一のアメリカ系100フィートのトラス橋である。

●港三号橋梁(旧大岡川橋梁)

我が国最初の鉄道橋である、旧大岡川橋梁(明治10年)に発端するイギリス形式ワーレン・トラス橋で旧大岡川橋梁の1連を改修し活用する。その前身は夕張川橋梁であった。

●旧臨港線護岸

新港埠頭の海陸連絡設備である臨港鉄道の一環として築造された石積の護岸。鉄道築堤築造技術の系譜を物語る各種護岸で特有な二段構成をとっている。

●新川家住宅主屋

養蚕が盛んな時代に流行った、両妻かぶと造りという形式をもつ市内ではめずらしい古民家。屋敷裏の山林とともに、かつての村のたすまいを良くとどめる。

●木村家住宅主屋(旧円通寺客殿)

江戸後期、享和2年(1802年)頃の建築。密院という宗教建築でありながら、書院や教習屋風の意匠を取り入れ、民家風のたすまいをもつ独特の建物である。

「長浜ホール」まもなくオープン

金沢区の長浜野口記念公園内に「長浜ホール」がオープンする。平成9年5月下旬予定。

長浜ホールは、横浜検疫所長浜措置場のシンボルであった旧事務棟を外観復元し、音楽を中心とした文化活動に利用できる。また、黄熱病の研究で有名な野口英世博士ゆかりの旧細菌検査室を改修し常設展示を行う予定。

●問い合わせ先

市民局文化施設課 TEL.671-3504

長浜ホール TEL.782-7371

希少な古民家を解体保存

田中家は旧平戸村(戸塚区)で名主役も務めた旧家である。江戸期の典型的な茅葺きの古民家。弘化元年(1844年)頃の創建。6代前の当主が息子の宮大工(別名明王太郎景元)に建てさせたといわれる。建て替えのため取り壊されるのを機に市に寄贈された。市では将来の移築をめざし、緊急に部材を解体し保存することとした。



解体前の田中家住宅



港一号橋梁



旧臨港線護岸



港二号橋梁



新川家住宅主屋



港三号橋梁(旧大岡川橋梁)



木村家住宅主屋(旧円通寺客殿)



旧細菌検査室



旧事務棟

天王森泉公園で復元工事はじまる

泉区天王森泉公園に旧安西家住宅が復元されている。明治44年頃に建築された清水製糸場の本館が、昭和になって現在地に住宅として移築されたもので、今回の公園整備にあわせ場所を移動して復元する。豊富な湧き水によるワサビ田やホタルの生息地などが確認されており、3年間に及ぶワークショップの成果を生かした運営が楽しみである。



完成予想パース

古民家を活用一栄区のパートナーシップ事業

栄区で古民家を活用した公園づくりが計画されている。これは計画中の(仮称)中野町公園に、江

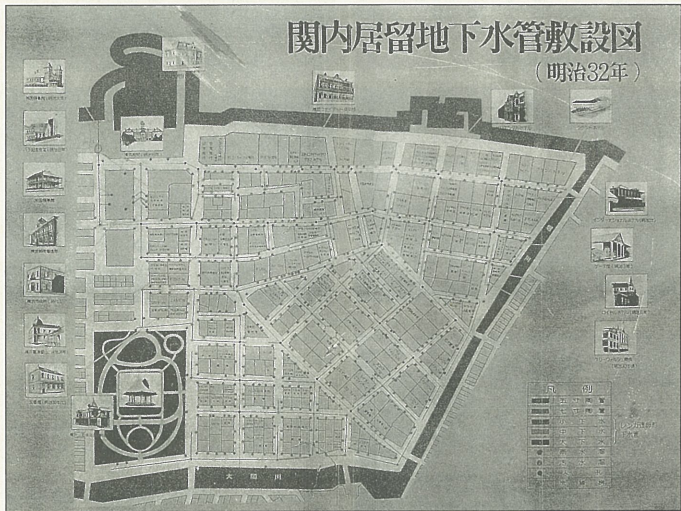
戸中期の古民家「小岩井家住宅」を長屋門とともに移築しようとするもの。実際に古民家を利用する地域住民や公募による市民を交えて、行政と市民が一体となった活用計画づくりをはじめている。

神奈川県庁舎・西谷浄水場上屋が 国登録文化財に

神奈川県庁舎・西谷浄水場上屋が国登録文化財に登録される。昭和3年に竣工した神奈川県庁舎は設計公募により建設された。中央の塔は「キングの塔」として親しまれている。西谷浄水場には濾過池整水室上屋をはじめ6棟の上屋があり、これらがすべて登録される。大正4年に完工した横浜水道第2次拡張工事の象徴的な遺構として評価された。

登録文化財制度について

平成8年度から従来の重要文化財指定制度に加え、登録文化財制度がスタートした。これは近代の文化遺産に対する認識の高まりのなか、緩やかな規制と保護措置により将来の文化財を保存しようとするものである。



関内居留地下水管敷設図 (明治32年)

Y O K O H A M A

横浜・中区制70周年記念
横浜の歴史と開港の舞臺
関内街並復元絵圖 縦30×横28cm、ジャバラ折製本、全長=約11.5m

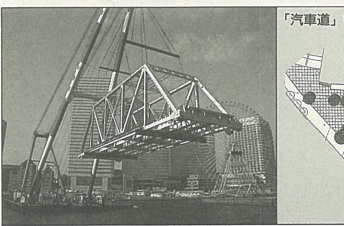
本町通り HONCHO DORI St. 1300
海岸通り KAIGAN DORI St. (THE BUND)
日本大通り NIHON ODORI St. 1350
馬車道 BASHAMICHI St. 1500

●関東大震災(1923年)によりほとんどが焼失してしまった横浜・関内。震災前の関内を調査し、復元絵圖として一冊にまとめられた。

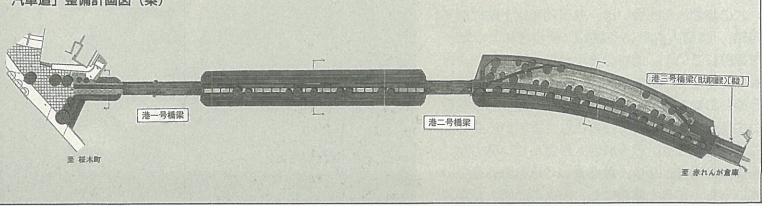
●予約特価期限 平成9年8月29日 予約受付中
平成9年10月1日発売!! 定価:3400円+税 ●予約特価:3000円+税
●お問い合わせ: 関内街並復元絵圖刊行会事務局
横浜市中区役所総務部建築課内 ☎045-224-8170 FAX.045-224-8109

110トンもの鉄の橋、 宙に浮かぶ?

平成9年2月、珍しい光景に出会うため港に出かけた。「汽車道」整備のためとはずした鉄の橋が、奇麗になって元の場所に帰るところである。起重機船に吊られ、強風に揺られながらの想いで橋台におさまった。歴史と港を感じるこのプロムナードをもうすぐ歩けると思うと今から楽しみです。



「汽車道」整備計画図(案)



山手の洋館、レディーの暮らし

エッセイスト 鈴木智恵子

山手の初夏は百万本のバラに彩られる。鉄の門扉の向こう側、燦々と降り注ぐ陽光を受けて、バラの花がそよ風に揺らぐ。美しい時を迎えて、ひととき華やかに西洋館。

最近巷でブームの英国式ガーデニングも、山手では明治から続く庭づくりの伝統に過ぎない。一見さげないが、その実、女主人の人情が偲ばれるような、よく手入れされた庭に出会うと、ついその家の暮らしに思いをはせてしまう。

住まいとしての西洋館は、外から眺めるだけではつまらない。しっかり中も覗かねば。山手のレディーの洋館暮らしは門の向こう側に広がる女性の憧れの世界。だが、個人の住まいをおいそれと拝見できるわけもなく、山手にあまた洋館ありと言えども、インテリアも整ったエリスマン邸やブラフ18番館など、出入り自由な洋館は貴重な存在だ。

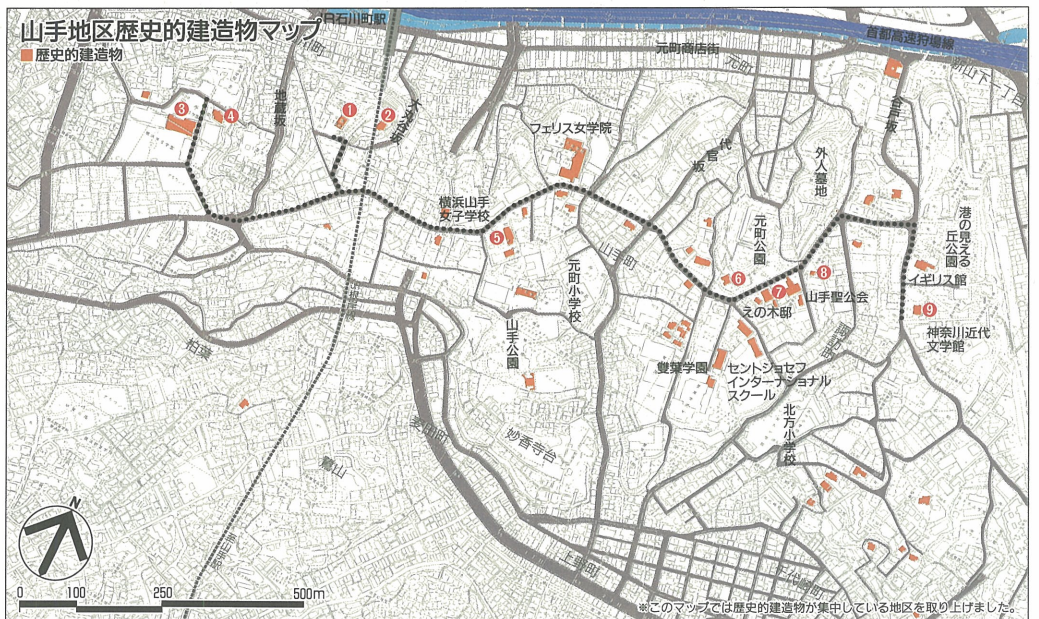
山手・イタリア山庭園の高台に美しい姿を見せる「外交官の家」は、八角形の塔屋がチャームポイント。渋谷から移築復元された山手の新しい貌として、関東大震災で明治期の洋館ほとんどを失った山手で、かつての古き良き山手を彷彿とさせてくれる。

特に、インテリア好きな現代女性を魅了するのが邸内の見事な室内のしつらい。往時の上流階級の洋館の暮らしを偲べるよう、それぞれの部屋にふさわしい家具が置かれている。

屋敷のかつての主、内田家の家紋が美しく装飾された玄関の扉を開けると、漆喰の白壁に黒い木のコントラストが鮮やかな重厚な空間が広がる。使込まれて黒光りする階段は、フォーマルな一階部分とプライベートな二階部分をつなぐ架け橋でもあり、正装した内田夫妻は、この階段を上り下りして、見事に公私の外交官生活を演じきった。

ある時はイブニングドレス姿で客間に現れてホステス役をこなし、ある時はベランダの藤椅子にもたれてアフタヌーン・ティーを楽しむ外交官夫人の優雅にして華麗な生活。

アメリカ・ヴィクトリアン・スタイルの邸宅には、今もそんな暮らしの残り香が漂う。



□外交官の家の概要

所在地 横浜市中区山手町16番「山手イタリア山庭園」内
 施設規模 復元棟 構造：木造2階建（塔屋付）
 建築面積：192.87㎡ 延床面積：412.33㎡
 付属棟に展示コーナー、休憩コーナーなどを設置

旧所在地 東京都渋谷区南平台町5番12号
 創建 明治43(1910)年
 建築主 明治政府の外交官「内田定雄」(1865~1942)
 明治22年、帝国大学を卒業後外務省入り。ニューヨーク総領事、フジール特命全権公使、トルコ特命全権大使などで活躍。

設計者 アメリカ建築家「J.M.ガーディナー」(1857~1925)
 立教大学の校長として来日した教育者であり、宣教師。建築家としても活躍し、明治村に移築された日本聖公会京都聖ヨハネ教会堂(重要文化財)などを設計。

特徴 建物は外壁を下見板張りとし、内部の壁や天井に漆喰を多く用いている。
 19世紀にアメリカで発達したヴィクトリアン様式を基本とし、アメリカのアーツ・アンド・クラフツの影響がみられる内装がほぼ全て残り、明治期の高級洋風住宅の姿をよく伝えている。



●ブラフ18番館：認定歴史的建造物



●山手214番館：市指定文化財



●エリスマン邸：認定歴史的建造物



●山手111番館：登録歴史的建造物



●横浜共立学園本校舎：市指定文化財



●カトリック山手教会聖堂：認定歴史的建造物



●山手234番館：登録歴史的建造物



●山手111番館：登録歴史的建造物

家を愛する想いと との出会いから生まれた 最高の結末

法政大学教授 陣内秀信

この建物との出会いは、もう10年以上になる。当時、「東京人」という雑誌に街歩きのエッセイを連載していた。渋谷の南平台を歩いていたとき、坂を上った木立の中に、いかにも明治の洋館という感じのすてきな洋館を見つけた。とりわけ現役の住宅として使われ、住みこなされているその姿に私は魅かれた。どうしよう人が住んでいるのか。私は興味津々となり、意を決して恐る恐る近づいていった。すると偶然にも、一人のご婦人が家の



移築前の宮入邸（渋谷区南平台）

中から現れたのである。それが宮入久子さんであり、その出会いこそがすべてのスタートだった。突然の訪問にもかかわらず、宮入さんは本当に我々を歓迎した。そしてこの建物が、ガーディナーという有名なアメリカ人の建築家の作品であることや、できることなら移築して保存したいという話などをしてくれた。

私はすぐに、仲間である建築探偵団の藤森照信氏に相談し、再び一緒に押し掛けた。外観もよかったが内部空間はもっと素晴らしい。すっかり気に入った彼は、横浜開港資料館の城さんを通じ、以前から洋館の保存に熱心であった横浜市の都市デザイン室を紹介してくれた。

横浜市はこの洋館に、かつてイタリア領事館があった山手の丘の上のいちばんいい場所を提供した。創建当時の南平台にも似たこの場所は、この建物の価値をさらに高め、今年、重要文化財に指定される。宮入さんの想いが移築としては最高といえる条件に巡り合わせたのだと私は思う。